



# 物語をつなぐ —千年の夢を達成させていく—

岩田 正樹

聞き手・苗代 杏 山下 希実 (石川県立穴水高等学校1年)

## 生まれて育った穴水に恩返し

やんちゃ坊主でしたよ。小学校、中学校は。今でいうおちこぼれで、外の方で遊んでばかりいて、勉強しないで、良い高校へ進学できなかったからね。高校卒業後は県の職員になって、農業関係の指導員になりました。農家さんの栽培の指導を中心にやって、農家の後継者の、若い人の将来希望が持てるようにという仕事をやらさしてもらいました。定年退職後に穴水に帰って来たんは、やっぱりここに生まれてここに育ったから、帰ってきて穴水に恩返しができるんじゃないかなってという思いがあったんです。それで、県の事業で、にんざき新崎・志ヶ浦里海里山推進協議会というものを立ち上げた時に、協議会の代表になって、地域を豊かにするためにどうすればいいのかっていうのを考えながら、今現在活動してきとるっちゅうことなんです。

## ボラっていうのはどんな魚

ボラは昔から穴水町の人が好きで食べる魚やったんやね。私たちの生活になじみが深いということで、川へ上がって家の前まで毎日泳いでくる。こういう入り組んだ入り江の中、風の当たらない静かなところに、ボラは好んで生息するんですね。非常に神経質で、すごく学習力の高い賢い魚ですから、やぐら櫓に近づいてきて人間の気配を感じたら、もう網の中に入らない。普通の魚ならこういう海の底に潜っておるんやけれども、水面すれすれの浅い所まで来て、普通の魚とは目の位置も違うので、上のこんな所にも目が届く。人が動いたりする影が映るとボラはもうその網の中に入らなくて、ビュンとものすごい速いスピードで引き返してしまう。だから、櫓の上へ上がってしまうと私語をつつしんで、動きなし、じーっとしとるだけ。ボラ獲るまで。

## おもしろい商売

5月～7月の3ヵ月。特別な用事がないかぎり毎日朝5時～9時くらいまでの4時間、櫓の上におって漁をしとるんです。網は、新崎の地形に合わせて、特注で作ってもらってます。新崎は遠浅の地形なので、磯のほうは3m、奥のほうは6mといういびつな形の網を海の底に仕掛けてある。櫓の一番上は海面から8メートルくらい。家の3階ぐらいの高さのところまで私が座って見ると、10分刻みとか15分刻みでボラは網の中に入ったり出たりする。櫓の上から見て、魚の本数が分かるのやて。今5本入ったとか、今度は10本入ったとか、次は20本入ったとか。本数を上で数えながら、30匹を超えたときに網の口を閉めるように綱をたぐる。目で確認してどれだけ捕れるっちゅうことが分かるでしょ。他の商売は捕ってみて初めて分かるでしょ。これは、魚が入ってきたのを見て捕るんやから計算できるげん。先ほど言いました30本を目標に捕るとすれば、30本捕れば1本1000円に計算すれば3万円や。1日3万円捕れる。4万円ほしいときは40本の群れが入るのを我慢して捕ればいいちゅうそういう商売ですから、おもしろいわい。でも、考えた通りにはいかないんやぞ、それが漁なんやよ。1本もこないときもあるげんけども、まあ捕ろうとして、目標をもって頑張る仕事が出来るとちゅう、そういうおもしろい商売ですよ。

## 17年ぶりのボラ待ち櫓漁

私はね漁師になってまだ3年しか経ってないげっちゃ。それまでは勤め人であって漁をしてなかったんですよ。ボラ待ち櫓漁を立ち上げたのは5年前からなんです。17年間、穴水町にボラ待ち櫓漁をやらなくなってブランクがあったんですよ。それを私たちは17年後に櫓漁ってことで復活させたんですよ。

はじめは、荒れた山を間伐して山を豊かにするちゅう仕事が入ったんですよ。その時にその木を利用したボラ待ち櫓漁をやってみようという思いが強くなったということなんです。櫓の建て方は、最初は全く分からなかったわね。何力所か建つとるのを見て、見よう見まねで1基組み建てて見たんや。それは、お隣の集落にモニュメントとして建てたんですよ。みなさんに見て喜んでもらえるためのものを。1年で1基建てて建て方分かって、2年目にはもっとでかい材質を使って作って、漁をする場所のこっち（新崎）へ持っ

てきた。材料運んで海まで持って行って建てる間は、3か月ぐらい。建てるのに丸1日かかりました。建て方はこれは機械を使って今の建て方で建てとる。船のエンジンの力でこういう寝たものをぐーっと起こして建てた。海の中に入っている部分は腐らないようにプラスチックを巻いてやるんですよ。昔の人はそんなことしないで、材だけのもので櫓を建てたということですから1年しか保たないげん。だから、私たちは5年間保たせにゃならんという思いでやったん。技術としてもそういうことで伝わっていけばいいのやから。普通は毎年毎年こんな建てるとには、莫大な人数と金が必要やったんやけれども、まあそれが省略出来るようになりましたわね。

1年目は漁をしていた人の話を聞いて、その言う通りにやった。話をしてくれた人は、網の大きさと経験で仕事はできたんだろうけど、私たちは素人だったから網の中にほとんど魚が入らなくてみんな逃げてしまった。今は、ここまでこの辺まで魚が入ってくればいいと、素人でも分かるような針金線をおいてある。マーカー線という、ここ行けば魚は戻っても網がこうやって水面から海面の上に出ってしまったときは戻り切れなくてその中に閉じ込めてしまう、そういう仕組みでやってる。それは経験の中で出てきたやり方なんです。見極めるのにだいたい2年くらいかかった。それから、



新崎公民館にて



ボラがあがる港で

数かぞえて捕るようになった。昔は上げるまで分からなかった。出ていくもの計算できなかつたから、今はもう出てくのがいないから、今日30本捕りたかったら30本群れが入るまで我慢すれば、捕れる。効率は少し良くなってきました。網の角度変えたり幅変えたりいろんな方法で少しずつは変わってきてます。だから、経験というのは、私たちが次の代につないでいけるようにするためにしとる。次の代も効率よく生計を立てられる仕組みをその間に考えていかなければならない。最初の年から3年間くらいは、データとりで一生懸命だった。だから今は、ボラのことに限っては私たち協議会が一番詳しい。まだ完璧ではないけど少しずつ改良しながらやってるんです。

### 30年後の漁師の生活

ボラを主力に生活できるのを考えとる。それが可能かどうか分かりませんが私も私たちが頑張ってそういったものを、次の世代まで残せるような形ができればいいなということでやとるんですから、今のところボラ漁で生計をたてられるところまではいってません。10年くらい前はそれで生計をたてていた人がいたし、30年くらい前は結構な仲間はいたんです。昭和30年代くらいまではボラというのは非常に高価な高い魚やったんです。たくさんとれなくてもボラ漁で生活はできた時期はあったみたいです。

ボラにも白目と赤目ちゅう種類は2つおるんや。汚いところ好んで上がるやつは、赤い目のボラが多い。私たちのこ

ういう静かなきれいな海に獲れるいわゆる七浦とかそういうところに獲れる魚は白い目のボラで、非常に美味しいのよ。昭和30年代に町の魚屋さんで買って食べた1本のボラが3000円した。今、平成29年、ボラは1本500円に落ちた。

それを食べなければ1年が終わらないというそういう習慣も穴水にあったんやて。特別な魚やってん。能登はお祭りが盛んやろ？大町祭りには、近在からみんな御輿持って獅子舞で出ていったんやて。山の人達は、あるいは町中の大人達はですね、その祭りに行ってボラをあてにしてお酒飲むが楽しみにしとった時代があったんやて。1年に1回の自分のご褒美やから1本3000円のボラでも思いっきり食べて、満足して帰った時代があったんやて。今は、食べる人が少なくなったからたくさんとらなければ生計としては成り立たないと思いますよ。

町では昔からみんなの食べ方ではボラ茶漬けというのがどこの家にも食べるやり方。それから、お刺身とかフライと言われる食べ方をしてきとります。自身の魚で、鯛に負けないくらい美味しい魚ですね。最近では若い者向けに、ハンバーガーや唐揚げみたいなのになったりしてますはね。若いお母さんや子どもさんの胃袋をつかむような料理の方法も考えて改善しながら、町の宝にもっともっと磨きをかけなければと思っておるん。それが、応援団になって1本3000円のボラを買ってくれるのであれば、私たちの漁師の仲間がたくさん増えてくると。たくさん増えてくれば、町の産業としてボラ待ち漁が成り立つようになるんだらうと。そこまで何年かかるか分からんけれども、20年先、30年先のことを

思いながらボラ漁を続けて、それをみなさんに分かってもらえるように発信していくのが私たち協議会の仕事だなと今思ってるんですよ。

## 伝統を背中に背負って歩く

ボラ待ち櫓漁をしようと思ったのは、なんとか復活して後世の若い者に伝えていかならんという思いがあったので。どこにもない漁ですから誰かが貰って誰かが残さならん。ここでその火を消してしまったらだめだと。これは穴水の宝なんですよ。ただ、伝統を背中にしよって歩くという、それしかないじゃないですか。

パーシヴァル・ローウェルが明治45年に能登紀行という本を書き残しています。その本に新崎あたりの櫓にのぼったというのが残ってる。船で見たときにはこんな奇っ怪な構築を見たことないと。まるで怪鳥ロックの巣のようだと。だから私たちはローエルが櫓にのぼった場所にわざわざ櫓を建てさせた。みんな、その物語をつないでかんなん。町の伝統漁でとれた町の宝のボラは1年に1回くらい食卓に並べてくれば、ボラ漁ちゅうのは産業として残る。穴水の宝として守っていけるんやけどと思ってる。1000年の夢をそこへ達成させていく。今まで200年続いたものが俺たちが転ぶと止まってもうげん。モニュメントだけやったら海に立てる必要ひとつもない。海に立てて網を張ってボラをとってこの伝統漁を、伝承料理をみなさんが味わうちゅうそこまでいかなダメなんですよ。その火は消すなっていうことで頑張ってるんや。軽い気持ちじゃないんよ。その重たいものを、ほんとに担いどるちゅう責任感。誰かがそれを紡がならん。誰もやらなんだらそこでストップしてしまう。誰かが漁をやらないけん。その誰かに誰がなるか。できる誰かに自分が必要ならなければならない。そういう使命感。

物語をつなぐということで、今のところは私たちは商売じゃないんやから、いつの時期にボラを捕ってみなさんに、喜んでもらえるかという物語を考えている。ボラは1年中食べられるけれども、私たちはそのボラの元気のいい一番おいしい時期に、お茶の一番採れるおいしい時期に、ボラとお茶とマッチングさせて自分のご褒美に食べられるような、そういう物語を描いてその時期だけ漁をしとる。商売を考えたらボラの身よりカラスミをとったほうが高い。身をとった場合一本500円くらいしかない。私たちは500円の身でもその物語を楽しんでやっとる。あくまでもそこなんやっ。

百姓が農繁期が終わって非常に疲れて体を癒そうという時に、自分へのご褒美に贅沢なものを食べさせてやるという、その贅沢の中にボラが入ってたんじゃないかなと私は思ったんですよ。5月、6月には漁もあるし、お茶も採れるし、疲れたものをそのボラとお茶で、自分の贅沢にでき

たんじゃないかなと思います。今そういうものは、無くなったけれども昔はそんなことでこの時期に捕れるボラが重要視されたんじゃないかなと。商売は1年中やればいいんやけれども私たちは伝統を守るちゅうことと最高のものを消費者に供給したいちゅう、この2つだけなんや。本当の漁師さんと俺たちが地域おこしでやっとる話とは少し違うかもしれせん。私はそういう思いで一番おいしいものを皆さんに食べてほしいと、そういう思いで今やっとる話なんですよ。

現在は、捕ったボラは1本1本小さい網ですくって船の上の小さな生け簀の中に入れて、生かした状態にして岸まで持ってくる。生かして持ってきたのは、さらに港の大きな生け簀の中に入れて、酸素を送って1日くらいおけるような状態にしてあります。それでそこにおいてある魚を、欲しい人が来たらおあげするというので、今取り組んでいます。車に乗せて持って歩いてお店に並べて買っていただく仕組みは、今のところしてないんです。

私たちは目で見てボラというもんは、このぐらいならこれくらいの値段で買ってもいいなということをお客様と私たちのやり取りの中でその評価をしていただければいいなと。

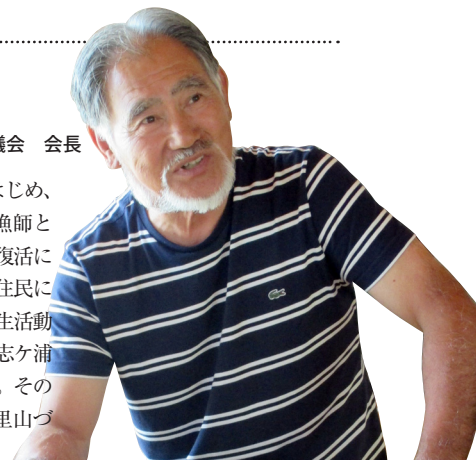
遊び心の中でやっとる。俺たちは本当の漁師じゃないから。遊びながら楽しみながらこの伝統を守っていければいいなということ今頑張ってるんや。ここは私たちの遊び場所なんです。ただここ来て、ボラ網漁をどうしようとか、相談できる場所として持つだけなんやよ。ここは誰が来てもウェルカム。誰でも来れる。『見笑庵』という看板をあげとる。ここに座って、みなさん笑って能登を眺められる場所。そういう場所なんや。ボラ待ち櫓はちょうどここから見えるやろ。それでボラが入ったとかちゅう話をしながら、ここで笑って居る場所。そういう気持ちが持てる場所を作ったんや。 [取材日:平成29年8月2日、9月2日]

## PROFILE

**岩田 正樹** いわた まさき

昭和23年8月31日・69歳  
新崎・志ヶ浦地区里海山推進協議会 会長

20歳の時に県庁職員として働きはじめ、62歳で退職。その後、穴水町で漁師として5年間従事し、ボラ待ち漁の復活に取り組む。平成21年8月に地域住民によるボランティアで里海山山の再生活動を行うことを目的とした「新崎・志ヶ浦地区里海山推進協議会」を設立。その活動が平成23年に「いしかわ版里山づくりISO」に認定を受ける。



● 取材を終えての感想 ●



聞き書きを通して、この活動がものすごく大変だということを知りました。私が想像していたのは、話を聞いて、書き起こして、文をまとめるだけの簡単な作業でした。しかし現実とは全然違って、一番大変だったのは書き起こす作業でした。話を聞いて、それをパソコンで入力していくというのは、簡単そうだけれど、実際にやってみると本当に大変でした。嫌になるくらいパソコンと向き合いました。ですから全ての書き起こし作業が終わったときには、うれしくて、一緒に作業をした友達とハイタッチをしたくらいです。また、この経験から、パソコン入力の速度が上がり、それもうれしいことの一つです。

私たちが取材させていただいた岩田さんは、ボラ漁への熱意がとても強い方でした。千年後までボラ漁を続けていくためのことを考えていました。千年後は3018年です。今、この地球上で3018年のことを考えているのは、きっと私たちが取材させていただいた、岩田さんだけだと思っています。こんなにも一つのことに強い熱意を向けられるということは、すごいことです。私も将来熱中できることを見つけられたらと思いました。 苗代 杏(写真:右)

今回の聞き書きという活動を通して、穴水町の歴史やボラ漁についてのことなど、たくさんを知ることができました。岩田さんのお話を2回うかがって、ボラの性質や特徴、今後の漁師さんたちの生活のことなどについても、たくさん知ることができました。また、岩田さんの、ボラが好きな気持ち、ふるさとのことをもっともっとたくさんの人に知ってもらいたいという気持ちがよく伝わってきました。

春に先輩たちの聞き書きの発表を聞いたとき、最初は楽しそうだなと思ったけれど、聞き書きを実際にやってみるうちに、だんだん大変になっていって、完成させることができるか、とても不安でした。パソコンを使って書き起こしていく作業も、思っていた以上に大変だったけれど、やりがいを感じることもできました。

この聞き書きという活動の経験を、将来に生かしていければと思います。 山下 希実(写真:左)